

マス・メディアにおける儀礼

——日本海重油流出事故報道を手がかりに——

茨木 正 治

I 問題の所在

II 儀礼・象徴・メディア

(1) 政治と儀礼、象徴の利用

(2) メディアと儀礼

III 事例研究——日本海重油流出事故報道——

(1) 分析方法

(2) 分析結果と考察

1. 概略

2. 写真にみる「重油流出事故」

3. 「事故」の象徴化——小松市長辞職問題——

IV 結論と課題

I 問題の所在

本稿の目的は、出来事の報道における儀礼性とそれに関わるメディアの役割をあきらかにすることである。いいかえれば、マス・メディアによる事象の「儀礼化」(ritualization)の過程に含まれる「政治」⁽¹⁾的意味を明らかにするといってもよい。

メディアが社会的現実を構成するという考えは既に知られている。⁽²⁾出来事のニュースとしての役割、ひいては報道することの意味を想定することにより、メディアが単なる「情報の導管」ではなく、「現実の構成者」であることがわかる。このとき、出来事の「再構成」には一定の手続きがみられる。出来事それ自体は、それに関与する人々の認知の仕方によってさまざまな様相をとりうるはずである。それがある程度の領域に収斂されるのは、出来事を「伝達」という行為によるところが大きい。出来事を相手に伝えるためには、ある一定の「型」が必要で、その「型」は発進と受信の双方において共通に存在するものでなければならぬ。伝えようとする側(情報の「送り手」)は、出来事を認知するときに受け取る側(情報の「受け手」)を考慮して認知することになる。ここにおいて、「送り手」と「受け手」との間の情報の伝達が「送り手」の情報認知および選択と無関係ではないことになる。

マス・メディアの「受け手」は不特定多数の大衆であるといわれる。しかし、またそれゆえ、「送り手」自身も他の報道において、他のメディアと接触することにより「受け手」となりうることや、各種の当該メディアへの意識調査や反響などがあることから、ある程度の「受け手」像に基づく「型」を「送り手」が構成して(しながら)出来事を取材し編集し、報道する。したがって、「送り手」が編集し構成した出来事が報道される仕方を詳細に検討することによって、「送り手」が描く「受け手」像を再構成することが可能になる。⁽³⁾報道された出来事の再構成は、「送り手」としてのメディアの現実構成と「受け手」への認識の双方を窺い知る手がかりとなる。

ところで、先に述べた「伝達」の「型」はそもそものから構成されているのだろうか。ある出来事を報道するとき、一定の定型化された行動類型に似た手続き（「儀礼的手続き」と本稿ではよぶ）を通じてひとつのまとまった意味を当該出来事に付与させる。こうしてできた「意味付けられた出来事」が、個々の経験・知識となって新たな情報の認識や伝達を行なう。このような「意味付けられた出来事」は、アドニーとメインのいう「象徴化（された現実）」あるいは「象徴的現実」（symbolic reality）に対応できる。

この「象徴化された現実」は、出来事を特定の視点から特定の要素を抽出して構成しかつ凝集したものであり、「送り手」の現実構成の源泉のひとつとなるだけでなく、メディアを介在して「受け手」にも認知や態度に影響を与える。このとき、この「象徴化」の過程を状況や現実の規定（定義）作用とみなすならば、どのような要素が「象徴化」に選ばれどれが捨象されるかは、きわめて「政治的」な問題をはらむ。凝集シンボルとしての出来事は、一見多様な解釈を許すようにみえながらもその実、特定の解釈を特定の感情を喚起させることに寄与する。たとえば、選挙が「参政権」の行使による「国民の権利」とされつつも、いったん当選し多数勢力を形成した政党の政策は「国民の支持を得た」ことになってしまう。この場合「支持を得た」政策は、国民が多数党の政策に好むと好まざるとに関わらず国民によって当該政策を正当化したことになる。また、「湾岸戦争」を「一国平和主義」の情眼をむさぼるものへの鉄槌と「象徴化」すれば、「湾岸戦争」によって、「護憲体制」や「平和主義」シンボルの価値の低下が生ずることになる。こうした「政治性」は、現実の構成過程における儀礼的色彩のなかにもみることができ、**「象徴的現実」が源泉となつて儀礼化が進行することから、儀礼の過程に価値配分をめぐる相互作用が含まれることは明らかである。**どの儀礼の手続きを選択する（した）かにおいて、どの「秩序」を維持するのかが明確になるとみられるからである。さらに、儀礼そのものが既存の秩序における支配―被支配の関係を顕在化させるとともに、共同体や組織の統合を「神話」や「象徴」にもとづいて形成させるはたらきをもつから、儀礼化された出来事には、「政治的意味」が含まれていると

みることができる。

本稿では、マス・メディアとして新聞をとりあげ、新聞報道が果たす現実の再構成作用を、九七年一月に生じた日本海重油流出事故についての報道を手がかりとして明らかにする。新聞に掲載されている記事と写真を分析の素材として、重油流出事故報道がどのような過程を経て構造化(象徴化)され、どのような「象徴的現実」に変容していくかを考察する。

九七年一月四日、ロシア船籍の「ナホトカ号」が日本海で座礁して沈没した。それから時をおかずに日本海沿岸の諸地域に「ナホトカ号」から流出した重油が漂着し始めた。この時、重油流出「事故」はそれに付随する諸事実からいくつかの特徴が強調されていく。ひとつには、「事故」から「災害」に関する諸特徴が強調されることがあげられる。この強調のされかたには定型化された行動類型が認められることから、一種の儀式・儀礼の過程とみることができ。さらに、儀礼化された「事実」はひとつの象徴としてある種の「政治性」をもつ。すなわち、重油流出事故報道全般のもつ「災害」としての意味付けが強調されるにつれて、儀礼として確認される価値やイデオロギーが象徴を介して種々の小儀礼を作り上げ、状況の規定や価値の配分に寄与するのである。具体的には、「災害」と規定された重油流出「事故」が、小松市長の辞職を誘発することになることを示すことによって表される。当該「事故」が儀礼的手続きにより「災害」として象徴化され、当時の小松市長の行動に影響を与えたことを明らかにする。

ところで、新聞が重油流出事故を報道する方法には、新聞の種類によって差異がみられる。この「事故」の発生ないし影響に直接関わった地域からの報道を主にした新聞と、被害の影響が間接的ないしほとんどなかった地域からの報道となった新聞とでは報道の儀礼化に違いがみられるのである。前者は島根県から新潟県にいたるまでの地域の「地方紙」である。後者は、「事故」の地域以外の「地方紙」ないし「全国紙」(中央紙)が該当する。⁽⁴⁾加えて、報道写真の機能として、記事の内容の具象化に寄与することと画像としての独自の機能(記事ないし「見出し」(写真)の

説明とは異なった、撮影者の意図や主張、出来事全体を象徴する内容の提示などシンボルとしての機能⁽⁴⁾が表れると考えられる。ここにおいて本稿は、「地方紙」と「中央紙」との属性の違いが重油流出事故に関する記事と写真に反映するとみなして、以下のような仮説を提示する。

仮説 「重油報道において、地方紙の記事は身近な情報の発展としてより現実的・実践的な傾向を、中央紙の記事は象徴的・理念的な傾向をもつ。写真については、地方紙は具体性を、中央紙は象徴性をそれぞれ特色としてもつ。」

II 儀礼・象徴・メディア

(1) 政治と儀礼、象徴の利用

政治における儀礼の研究は、主に政治の主観的側面の研究の、象徴を政治行動の中心に置く政治象徴研究が中心となつて行なわれてきた（茨木、一九九五／一九九六）。この政治象徴研究の理論的背景は、多岐の領域にわたる。その中で、社会構造と象徴との関係を考察したものに、象徴人類学がある（茨木、一九九七b）。

儀礼がもつ社会的統合や政治的支配の確立に着目した象徴人類学のなかで、とくに政治の「過程」の象徴的理解を目的として儀礼と政治との関係を明らかにしたのがカーツァー（David Kertzer）である。儀礼⁽⁴⁾を宗教領域に限定したり、標準化された一切の人間活動に拡張したりせずに、彼は儀礼の定義をデュルケムの、聖なる対象の前での人間の行動を規定する行為上のルールという定義をもとに、中庸な立場を導く。近代産業社会における儀礼の力を重視したカーツァーは、政治の象徴的側面からこれを裏付ける（カーツァー、一九八九、p.9-20）。人間世界のカオス状況を一定の枠組みに置くための分析上の範疇として儀礼を考える。従来の宗教的な儀礼の定義にあったシンボリックな反復活動という属性とデュルケム（E. Durkheim）の定義を組み合わせて、聖なる存在を人間自身の相互依存の象徴とみなしたデュルケムの発想を生かし、儀礼を、社会的に標準化され、反復するシンボリックな行動⁽⁵⁾として規定する。

このような儀礼の規定のもとに、カーツァーは儀礼の特徴と政治的意義について述べる(カーツァー、前掲、p.20-27)。彼は、多くの人類学者が使う概念を使っていると述べている(前掲、p.20)ので、本稿では以下で儀礼の政治性を政治学のシンボル研究のそれと対応させて概観する。

儀礼の特性として、カーツァーは以下の五つの特徴を指摘している。

- (a) フォーマルな性質…「脚本」への依存、反復性、連続性
- (b) 参加者の「環境」…情緒の覚醒
- (c) 「ドラマ」⁽⁶⁾としての現実関与
- (d) シンボル機能…凝集、「多声性」、曖昧性
- (e) 革新性と保守性

(a)は、一定の流れが「脚本」を構成し、繰り返されることによって社会集団の認知・情緒・組織化に寄与すること、過去から未来へ続く連続のなかで安定を個人の内面に訴求させることに着目している。(b)は、情報の「送り手」だけでなく、「受け手」(儀礼の参加者)の属性がメッセージ内容(儀礼の内容)に影響を及ぼすとみれば、儀礼のコミュニケーション機能とみることができる。⁽⁷⁾(c)は、役割遂行の事故を客観化させる手段としての働きと、(b)で得られる「受け手」の心理的屬性としての情緒を喚起させる目的をもつ。この(c)は(b)と相俟って、「観客」のドラマへの参入を容易にし、儀礼が象徴する政治的価値や政治的現実に対する「観客」の距離感覚を麻痺させる点で、エーデルマン(Edelman)の視点と共有する。(d)の凝集と「多声性」は表裏一体のものである。シンボルが、多様な意味を統一・収斂させていると「凝集」となり、同じシンボルがさまざまな意味を含ませると「多声性」が強調される。(e)の「保守性」は秩序維持を意図あるいは結果としてもつ儀礼であり、参加者の諸要素によって儀礼を変化させるのが「革新性」である。

次にカーツァーは、儀礼の政治的重要性について、「（政治的）神話の具現化、神話の発展への促進」と「情緒的衝撃」の二点をあげている。「神話」と儀礼との関連は、ベネット（L. Bennett）が文化によって規定される世論形成との文脈で述べたことと対応する。抽象的な概念の認知とそれへの同化を儀礼そのものとそこで用いられるシンボルによって受け手である儀礼参加者が体験する。これは、構成された政治的現実の認知だけでなく、受け手への当該現実への態度にも大きく影響する。⁽⁸⁾「情緒的衝撃」では、儀礼参加者に「神話」への態度（総じて既成体制による支配の正当性を喚起させることになる）を選択させることで、象徴的満足感（安心感）を受け手に生じさせる。⁽⁹⁾ここにおいて、エーデルマンの儀礼認識との類似がみられる。

（2）メディアと儀礼

前節の儀礼は、出来事としての儀礼の性格が強いのに比べて、メディアとの関連は前章で言及した認識の「型」に関連する特徴がみられる研究が多くみられる。

マス・メディアが外的源事実と受け手の現実認識との間に介在し、現実像に影響を与えると考える「マス・メディアの現実構成論」についても、カーツァーは儀礼がその役割をはたすと述べている。

「現実構成論」のなかで、アドニー（H. Adoni）とメイン（S. Mane）が、マス・メディアの働きをシンボルを媒介にして「客観的現実」を「シンボリックな現実」に置き換え、受け手の「主観的現実」の構成に寄与するとした（Adoni & Mane, 1984）。これを受けてカーツァーは、政治の出来事、方針、システム、指導者への人々の認知と態度に影響を与えるシンボルに媒介された定型的行動として儀礼をとらえている。政治情報が一般にはメディアを媒介に伝達されることが多いことと合わせて、アドニーたちのいうメディアの「現実構成」機能をカーツァーは、儀礼に求めたのである。

彼は、こうした儀礼の働きを裏付けるために、政治的現実の認識を離れてより一般的な現実認知の方法に着目する。そして、そもそも人間の現実的認知とはどのような過程と特徴をもってなされるものであろうかという問いかけをし、この問いをいわゆる「社会的現実の構成」(竹下、一九九八)論としての認知心理学の「スキーマ」の知見に求める。「既存の図式化、抽象化された知識システム」を「スキーマ」とよび、それによる情報処理過程を概観し、その過程で「排除されるもの」と「強調されるもの」との対比とダイナミックスを見いだした。それは、社会的現実の「規定」(「解釈」)を生じさせるシンボリックなシステムであり、複雑かつ曖昧模糊とした政治世界を認知するにはより有効であるとカーツァーは述べている(カーツァー、一九八九、p.108)。

この「スキーマ」認知が含んでいる「排除の論理」は、「代表性」(representativeness)の概念にもよく表れている。この概念はある現象を所属カテゴリーを代表すると認知するならば、その事実に関わりなくこの認知に基づいて判断を行なう傾向のことである。儀礼によってある特定の価値やイデオロギーがマクロ規模で強調されると、この「代表性」機能によって、それ以外の価値や判断が捨棄されて個人のみならず参加者の集団の今後の行動や反応に影響を与えることになる。⁽¹⁰⁾ ここにおいて規定される社会的アイデンティティーは、「スキーマ」の多様性か、新旧「スキーマ」の交替を生じさせる外在的要因以外にはこれに抗しがたいものとなるとカーツァーは述べている。

「社会的現実の構成」を個人の認知レベルで振り返ったカーツァーは、ここから得られた知見をもとにしてよりマクロ的な「現実の構成」と儀礼の過程との関係について減給する。「代表性」の概念から敷衍して、秩序を所与(自然)のものともみなしうるのを文化と規定する。定まった行為に、定まったコミュニケーション回路によって、定まった行為を触発するのは同一の文化を相互に所有しているからであるとする。こうした受け手の背景をもちつつ、一定のイメージのみを強調して、それを招くシンボルを駆使することによってそれ以外の解釈を許さぬ「文脈」ができれば、ここに「政治秩序についての特定の見解を(儀礼が)普及する」(前掲、一九八九、p.116)のである。

では、なぜひとは儀礼によって生じた現実認識に甘んじるのか。前述した「代表性」認知や文化的規定および認知的儉約家（cognitive miser）としての人間像以外にもカーツァーは次のような要素を提示する。それは、儀礼におけるドラマ的要素、生き生きとしたシンボリズム、それらによって生まれた情緒的興奮が特定の主張にのみ注視する傾向をもたらしとしている（前掲、一九八九、p.118）。また、信念体系も儀礼の集団表現を通して再認識され、信念の「容」の「文脈」を提供するに至る。まさに「共通の信念の必要なしに、共通の行為を育てる」（前掲、一九八九、p.128）のである。このように、メディアとしての儀礼は、情緒的な要素と結びついたシンボルの反復的使用と相俟って政治的信念の形成に役立つ。

III 事例研究——日本海重油流出事故報道——

(1) 分析方法

一九九七年一月二日、島根県隠岐島沖でロシアのタンカー「ナホトカ」号が本体部から沈没、船首部分から重油が流出した。一月七日、船首部分が福井県三国町安島沖で座礁し、重油が三国町の海岸に漂着した。石川県には、翌日に加賀市の海岸に初めて重油が漂着し、沿岸地域では重油の回収作業が「人力」で行なわれた。その後、福井県三国町に漂着していた船首部分の重油の抜き取り作業が二月末に完了し、三月初頭から石川県の県内の各自治体が重油災害の終息宣言が相次いで発せられるようになった。四月にはいると、福井県やその他の関連各県も含めた自治体の重油対策本部が解散し、この事故は一応の終結をみた。

この事故（以下「重油流出事故」と呼ぶ）に関する新聞報道について以下の方法で内容分析を行なった。

分析対象は、石川県の代表的地方紙として、「北國新聞」、中央紙の代表として「朝日新聞」、「毎日新聞」、「読売新聞」（以下「北國」、「朝日」、「毎日」、「読売」と略記）の九七年一月三日から三十一日までの二九日間の朝夕刊に掲載さ

れた、「重油流出事故」に関する記事と写真である。なお、「朝日」、「毎日」、「読売」については縮刷版（東京最終版）を用いた。⁽¹²⁾

記事と写真については、それらの面積を「コラムセンチ」⁽¹³⁾を単位として測定した。また、次の基準⁽¹⁴⁾に基づいて記事と写真を分類した。

- A 被害者（漁民・漁協）の対応
- B 被害状況
- C 市民Ⅰ（ボランティアや自治体・政府への抗議や申し立てなど当該事故に積極的に関わる）の対応
- D 自治体、県（市・町・村）議会の対応
- E 海上保安庁、自衛隊、原発の関係者の対応
- F 地元議員、関係組織の長のパフォーマンス
- G 識者・評論家のコメント
- H 政府・国会・国内外の政治状況
- I 市民Ⅱ（傍観者として）および社会状況

分類項目の選択については、評定者三名（学部学生）に、「重油流出事故」に関する記事・写真（記事は縮刷版——「北国」も含む——の目次を参考にした）を見せて、二名の評定が一致したものを当該記事・写真の分類とみなした。三名の評定が分かれたものについては筆者が判定した。記事は見出しを、写真は見出しと画像と合わせたものをそれぞれ素材とした。

記事と写真の関係をみるために、右で示したAからIまでの記号を用いて評定された記事・写真を対象にし、これらの中から各分類記号のついた写真の掲載されている新聞の同じ紙面に掲載された記事に限定して、一つの記事を選び以下の項目に基づいて分類した。記事の選定は評定者一名（前出の評定者とは異なる学部学生）と筆者で行なった。

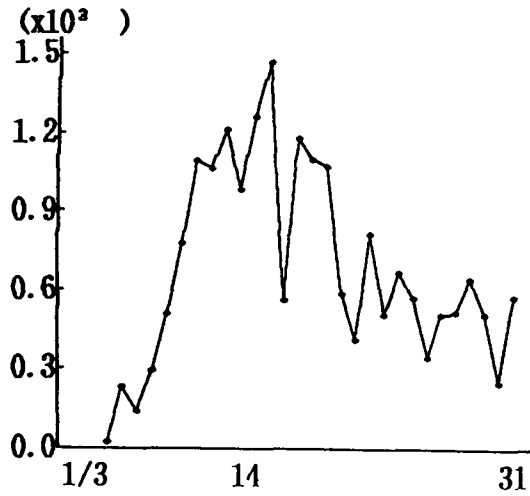
- ① 記号（A～I）が写真・記事ともに一致する
- ② 記号が一致しない
- ③ 同一紙面内に、写真の内容に対応する記事がない
- ④ 該当紙面に写真のみである

加えて、写真には上記の分類の他、(a) 構図、(b) 登場する人物、(c) 登場の機会、を分析の大枠として設定し、これらとともに写真に対応する記事内容や表現上の技巧を随時組み合わせた。

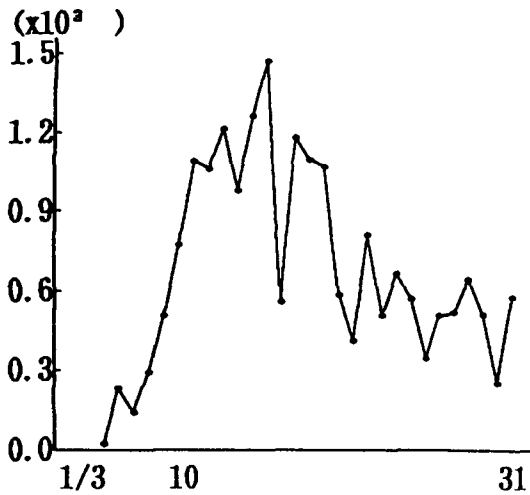
(2) 分析結果と考察

1. 概観 対象期間における「重油流出事故」の記事の総面積は、一九七三七コラムセンチ（一日平均六八〇・六コラムセンチ）であり、写真の総面積は、七七五六コラムセンチ（日平均二六七・四コラムセンチ）であった。時系列にみると、記事・写真ともに、日平均値を上回るのが八日から一八日の一日間であった。これは、石川県内に初めて重油が漂着した八日から情報量が増加したと解釈できる。他方、一九日以降の「北國」は、「小松市長不在問題」にも関心を払わねばならなくなった（一八日夜小松市助役逮捕）ため、「重油流出事故」の報道量が減少したとみられる。

(図 1) 「重油流出」 記事報道量 (「北國」)



(図 2) 「重油流出」 写真報道量 (「北國」)



一九日から三十一日までの「北國」に掲載された「重油流出事故」と「小松市不正入札事件」および「市長不在問題」における記事面積を比較すると、(表 1) のようになった。これより、「不正入札」と「市長不在問題」の面積の総和が「重油流出事故」よりも多い日が四日みられた。ここにおいても、小松市長の不在問題が「北國」の関心を分散させた要因のひとつであるといえる。

記事と写真の掲載面積を中央紙と比較すると次のようになった。記事については、「朝日」四〇四・一コラムセンチ、「毎日」四三〇・五コラムセンチ、「読売」三六八〇・六コラムセンチとなり、それぞれ「北國」の約五分の一の情報量であった。写真においては、「朝日」一〇五・三コラムセンチ、「毎日」七六〇コラムセンチ、「読売」一八〇・七コラムセンチと新聞ごとに「北國」の十分の一から五分の一とばらつきがあった。

時系列的にみると、記事では、中央紙は一〇日と一日、二三日・二五日・二七日、の二ヶ所掲載面積のピークがある。前者の二日間は、重油の漂着が島根から石川まで日本海沿岸の各県に漂着した（九日）ことと、運輸相が三國町を初めて視察し、政府が事故発生から八日後にようやく災害対策本部を設けたこと（二〇日）に起因している。また、後者は、回収作業での相次ぐ死者、運輸省の外国船監察の新設（二日）、重油流出を大規模災害と国土庁が認知

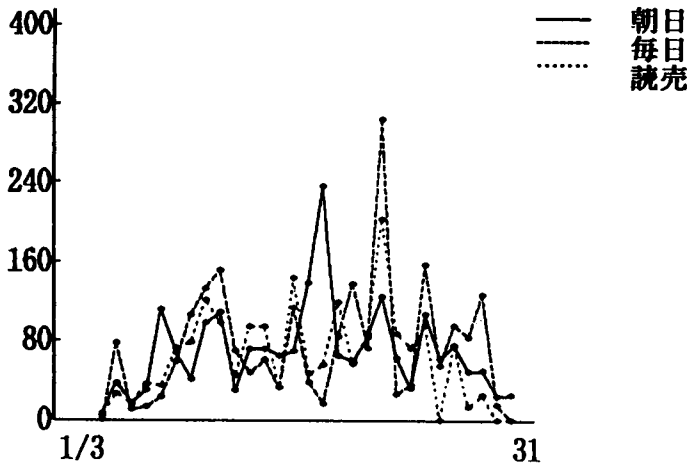
（表 1） 「北國」記事面積

（単位コラムセンチ）

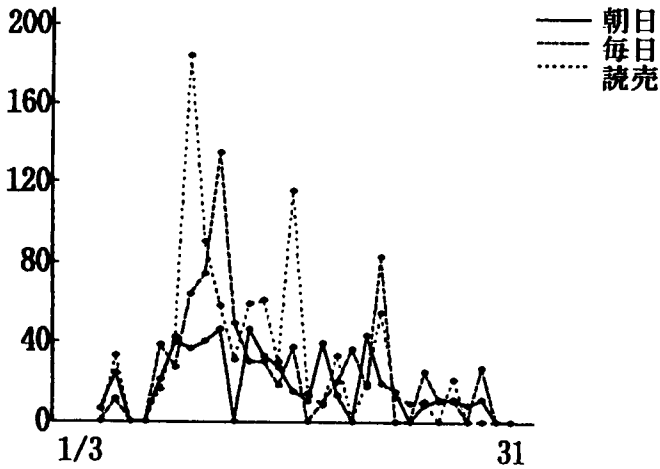
1 月	重油事故	不正入札	市長不在
19	579.3	306.6	
20	407	523.6	19.2
21	807	32.2	254.6
22	500.5	17.4	202
23	662		256.6
24	566		619
25	340		445.2
26	499.5	87	32
27	511		115
28	639		123
29	504.5		688.8
30	250		9.0
31	574	54.4	0
		1021.2	2845.4

（218.9）／日

(図 3) 「重油流出」記事面積(「中央紙」)



(図 4) 「重油流出」写真面積(「中央紙」)



(二二五日)、危機管理の不備を首相が反省(二二七日)といった政府レベルの出来事に対応して面積が増加した。

（表2の1） 「重油流出事故」の経緯（1月）

- 1月2日 島根県隠岐島沖で「ナホトカ」号が遭難
- 4日 漂流中の船首部から重油流出
- 7日 船首が福井県三国町安島に漂着
- 8日 石川県に重油漂着
- 9日 京都府、兵庫、鳥取両県に重油漂着
- 10日 福井・石川県沿岸などで漁船による海上での回収作業開始
政府災害対策本部を設置
古賀運輸相が三国町を視察
- 15日 駐日ロシア大使が座礁現場を視察
- 18日 兵庫県の男性が回収作業後に死亡。初の犠牲者
- 20日 流出油災害対策関係閣僚会議初会合
新潟にも重油漂着
- 21日 福井、石川両県で犠牲者
石川県町村議会議長の24人が28日までの日程でニュージーランド
へ行政視察へ出発
- 24日 ロシア回収船が三国沖に
- 25日 与党3幹事長が座礁現場を視察
- 26日 福井県越前町の海岸に「ナホトカ」号の船長の遺体が漂着
- 28日 小松市長が、重油漂着後にサイパンへ私的旅行をしていたことが
わかり辞意

（表2の2） 「小松市不正入札事件」「市長不在問題」の経緯

- 1月19日 浮見助役逮捕
助役逮捕で北市長会見
- 23日 小松市議26人全員にアンケート実施（「北國」）
- 24日 不在の際の虚偽答弁を市長認める
- 28日 市長辞職を表明

このように、記事に関しての「北國」と中央紙との差異は災害の当事者（直接の被害者）を読者に多く抱える「北國」と、全国の読者の要求に対応する中央紙（以下、「朝日」、「毎日」、「読売」をまとめてこのように略記する）の紙面の制約の違いが反映されているとみられる。すなわち、新聞紙面を便宜上「総合」「政治」「経済」「文化」「生活」「スポーツ」「国際」「地域」「社会」「論説投書」と分けるとすれば、「北國」は「地域」欄が全紙面の半数近くを構成している。総頁数に差がないことを勘案すれば、残りの半分の頁で他の九項目を割り当てなければならない。これに対して、中央紙は、若干の例外を除いて上記の紙面にかける割合はほぼ一定である。とすれば、「重油流出事故」における国政ないし国際（対ロシア・中国・韓国）関係にかかるできごとが生ずれば、従来の「総合」「社会」「地域」以外に当該事故報道の掲載箇所ができたことになる（突発的な大事件が生じないかぎり）。このため、中央紙は上記の期間に面積がふえたと考えられる。

分類の内容についてみると、「北國」の記事はB—D—A—C—Hの順に占める面積が大きい。被害状況—自治体—被災者—市民—I—政府となり、まず被害とその身近な対応という実務的な情報の提供に報道の主眼が置かれていたことがわかる。写真の場合には、対応する記事がある場合のみであるが、被災者—被害状況—市民—Iの順になっており、いわゆる「絵になる情報」を優先させているとみることができる。

これに対して、中央紙の記事では、「朝日」ではH—A—D—E—B、「毎日」ではB—H—G—I—A、「読売」ではB—H—A—E—D、となった。被害状況を重視する点は概ね「北國」と変わらないが、政府・諸外国の対応に関する記事がそれに次いで多いのが特徴としてみられる。これは、上述した中央紙の編集構成から、また、当該災害の地理的事情から「身近な情報」として「重油流出事故」が記事として成り立ちにくいことがあげられよう。

写真の内容についても、いくつかの特徴がみられる。「北國」では、A（被害者の対応）—B（被害状況）—C（積極的関与の市民）の三項目でそれぞれ三三・六％、二二・四％、一八・五％と「北國」の写真総面積の四分の三を占

（表 3） 「北國」記事・写真分類別面積（単位コラムセンチ）

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
記事面積	3408.5	5182.3	2524	3477	1324	473.8	1000.5	2313.5	67.5
写真面積	1668	1109	918	481.3	404.3	104.5	168.5	103	0

（表 4） 「中央紙」記事分類別面積（コラムセンチ）

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
朝日	641.8	1668	315	250	215	37.6	45	837.6	31
毎日	33.3	1607.8	179.2	231.8	127.6	27	409	1024	366.2
読売	32.6	2379.4	184.4	87.8	252.6	0	0	450.4	0

（表 5） 「中央紙」写真分類別面積（コラムセンチ）

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
朝日	234.6	475.8	111	40	151	21.2	0	20	0
毎日	453.4	627	167.4	117	89.2	62.4	0	55.8	28
読売	480.6	714	206.6	142	149.2	0	0	56	59.2

めている。これを、被害者の対応重視とするならば、中央紙は若干異なった様相を呈して、被害状況の重視とみることができるとができる。

すなわち、三紙ともBの被害状況を写し出すことを念頭に(平均四〇%)置いている。次にAの被害者の対応が続くがその面積における割合はBの約半分である。さらに、期間中の最大面積の時の内容を比較すると、「北國」は一〇日の回収作業の模様をテーマとしているのに対して、「毎日」(二一日)「読売」(九日)はともに写真のみの面があり、回収作業と被害状況の組合せで構成されている。ここにおいて、写真群の見出しは「押し寄せる「黒い海」」「読売」、「早くきれいな海に」(「毎日」)と被害状況の描写である。写真が画像と見出しの総合体であることを考えると、中央紙は被害状況の描写を重視し、その文脈で被害者の対応の「人海戦術による重油回収」をとりあげていることがわかる。

2. 写真にみる「重油流出事故」

前項の、内容による分類で上位を占めた三項目(被害状況・被害者の対応・積極的対応の市民)についてもう少し詳細にみていく。

① 被害状況

被害状況を表わした写真は、内容の点からまず、座礁したタンカーの状況と流出した重油による「海洋汚染」と、重油が日本海沿岸に漂着した結果生ずる「海岸の汚染」の二つに分けられる。(表6)から、これらの比率は枚数においてほぼ一対二、面積においてほぼ一対一であることがわかる。ここにおいても、面積・枚数のいずれにおいても中央紙の平均は「北國」の二―三割であり、「重油流出事故」報道全体の割合とあまり変わらない。

「海洋の汚染」については、枚数の点では「北國」と中央紙との間に有意な差はみられなかったが、面積において

（表6） B「被害状況」における各紙の記事・写真の枚数・面積
 〈海洋汚染〉

	朝日	毎日	読売	中央紙計	北國
①座礁タンカー と重油流出	※4枚 (142)	4枚 (187.8)	6枚 (289.6)	14枚 (619.4)	12枚 (458)
②流出重油	2枚 (65.8)	5枚 (232.6)	1枚 (40.4)	8枚 (338.8)	12枚 (697.3)
計	6枚 (207.8)	9枚 (420.4)	7枚 (330)	22枚 (958.2)	24枚 (1155.3)

※上段枚数（下段コラムセンチ）

〈沿岸の被害〉

	朝日	毎日	読売	北國	計（4紙合計）
①生物	6 (220.4)	7 (241.2)	5 (157.2)	7 (123.8)	25
②海岸汚染	0 (0)	0 (0)	5 (196.8)	22 (1027.3)	27
③その他	2 (47.6)	3 (116.4)	1 (28.8)	3 (78.5)	9
計	8 (268)	10 (357.6)	11 (382.8)	32 (1229.6)	61

(表 7) 「生き物」写真と記事との対応

	北國	朝日	毎日	読売	計
分類の 一致	4	3	4	1	12
(記事)	(121.5)	(90)	(191.4)	(102.2)	(505.1)
[写真]	[63]	[78]	[152.2]	[7.6]	[300.8]
分類の 不一致	1	2	1	2	6
(記事)	(24.5)	(125.8)	(89.6)	(133.8)	(373.7)
[写真]	[29.8]	[71.4]	[27]	[35.6]	[163.8]
対応記事 なし	1	0	0	1	2
(記事)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
[写真]	[19]	[0]	[0]	[65.6]	[84.6]
写真のみ	1	1	1	0	3
(記事)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
[写真]	[12]	[55]	[40.8]	[0]	[107.8]
計	7 (146) [269.8]	6 (215.8) [204.4]	6 (281.0) [220]	4 (236.0) [108.8]	23 (878.8) [803]

(図 6) 「朝日」 97・1・10 M(39)



は差がみられた。ここから、「北國」は日本海の汚染を一枚当りの面積が大きい写真で写し出すことによって、読者への衝撃を高めようとしている。もっとも、「海岸の汚染」についても確かに写真の面積は中央紙に比べて大きい。若干の留保がつく。(表6) からわかるように、中央の各紙が「海岸の汚染」を象徴するものとして、「生物の被害」を第一にあげ「海岸そのものの汚染」については、全く顧みないかあっても「生物」への関心を超えることはない。これに対して、「北國」では「海岸そのものの汚染」を表わす写真が「生物被害」の三倍強も掲載されている。ここにおいて、被害状況を生物の被害に象徴させてよりセンセーショナルに報道しようとする中央紙に比べて、「北國」では「海岸は汚れている」が生物への影響は少ない(まだわからない)という慎重な姿勢をとっていることがわかる。

この「北國」の姿勢を例証するものとして「生物」の写真に対応する記事の様子をみると(表7)のようになった。これをみれば、枚数に比べて「北國」の記事量が少ないことは明らかである。また、生物の内訳をみても、「北國」は七枚の写真すべてが水鳥に関するものであったが、中央紙は三紙合わせて三分の一の写真の被写体が鳥以外の生物であった。さらに「生物の被害」に関する写真について(図5)と(図6)のような「北國」と中央紙の対比がみられる。

② 被害者の対応

被害者がどのように「重油流出事故」に対応したのかを「北國」の写真は次のように写している。漁業関係者の対応として、「対策作業の協議」が漁協・魚連を通じてなされ、「重油汚染対策の準備」としてオイル・フェンスの設置や海岸の警備がなされ、海岸や近隣の海洋に重油が接近・漂着すると、杓・バケツリレー・簗による油粒の採取などによる「回収方法」が描かれる。そして、被害状況や後述のボランティア活動と関連して「人海戦術」や「被害者の苦労」をあらわすものとして「大写真」の「回収作業」が掲載される。それとともに、事故処理の明るい展望を示唆して「(魚)市場やそこにまつわる人々の状況」を写しだして読者にわずかではあるが安心感と希望を持たそうとしている。

（表 8）被害者の対応—「写真」の枚数と面積の内容細目

※枚（コラムセンチ）

	北國	朝日	毎日	読売
①漁業作業協議	3 (85.8)	0	0	1 (30)
②重油汚染への準備	4 (133)	0	1 (40.2)	0
③回収の方法	23 (953.1)	3 (116)	6 (264.6)	9 (356.5)
④回収作業	9 (440.5)	2 (87)	1 (42)	2 (45.8)
⑤市場・人々の状況	5 (109)	0	1 (73.6)	1 (16.2)
⑥その他	0	1 (55)	0	0
計	44 (1721.4)	6 (258)	9 (420.4)	13 (448.5)

(表8)をみると、上述したように「北國」のキメの細かな報道が目立っている。中央紙も総じて関心の焦点は「回収方法」にある。しかし、具体的な方法については「バケツリレー」と「杓」による回収に終始し、回収機械の考案などには至っていない。

「北國」の「被害者の対応」の具体性は、写真だけでなく対応する記事においても見られる。(表10)によれば、写真の分類と一致した記事ないし、写真のみの掲載が全体の八六%にも及んでいる。写真内容との忠実な対応をみせる「北國」の記事に対して、中央紙の記事は約七〇%が分類上の対応が見られない。もともとできごとの具象化を狙う報道写真にあって、九割近くの記事による対応はより実際的な問題として読者に訴えかけるものがある。中央紙はそれと異なり、写真の持つ象徴的・抽象的イメージの側面を利用したともいえる。記事が被害状況を語り、写真で杓による回収作業が描かれれば、写真内で用いられる固定化されたシンボルと相俟って、被害の悲惨さがイメージとして伝わることを想定したとみられる。

③「市民Ⅰ」・ボランティアの対応

ボランティア活動や対策の提言・抗議を自治体・政府に訴えかける、災害に対して積極的に関わっている人々(被害当事者は除く)を写しているものがこの分類に含まれる。

ここでは、「重油処理・回収作業に携わるボランティア」と「その他周縁部分の作業に関わるボランティア」(ボランティア作業全体)、「義援金の寄託」の三つに内容を分けることができる(表10)。

中央紙はボランティアの主体については、兵庫の高校球児以外は特定していない。ボランティアそのものに焦点をあてている。したがって「義援金」についての写真は掲載されていない。

これに対して、「北國」では、前述の「ボランティア作業」についても、神戸市職員、ロシア留学生、子供、高校生、釣り仲間、と多様な人物が登場し、枚数でも四割にものぼっている。さらに、「市民Ⅰの対応」の五三・八%を占

（表 9） 被害者の対応 写真と記事

	北國	朝日	毎日	読売	計
分類の 一致 （記事） 〔写真〕	27 (1340.8) [1033.6]	0 (0) [0]	4 (185.2) [183.2]	1 (49) [33.6]	32 (1575) [1205.4]
分類の 不一致 （記事） 〔写真〕	6 (488.5) [264.5]	6 (300) [258]	3 (169.4) [126.4]	11 (690.4) [264]	26 (1648.3) [912.9]
対応記事 なし （記事） 〔写真〕	0 (0) [0]	0 (0) [0]	0 (0) [0]	0 (0) [0]	0 (0) [0]
写真のみ （記事） 〔写真〕	11 (0) [422.9]	0 (0) [0]	2 (0) [110.8]	2 (0) [152.8]	15 (0) [686.5]
計	44 (1829.3) [1721]	6 (300) [258]	9 (345.6) [775]	14 (739.4) [450.4]	73 (3223.3) [3204.4]

（表10） 市民Ⅰ. ボランティア 写真 枚数…枚 （面積）…コラムセンチ

	北國	朝日	毎日	読売	計
ボランティア作業 （重油処理・回収）	17 (614)	1 (50.4)	3 (103.6)	5 (109.4)	26 (958.4)
ボランティア作業 （炊き出し・清掃）	1 (36)	2 (39)	0 (0)	1 (16.2)	4 (91.2)
義援金寄託	21 (106.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	21 (106.3)
計	39 (756.3)	3 (89.4)	3 (103.6)	6 (206.6)	51 (1155.9)

(表11) 市民 I. ボランティア 写真と記事

	北國	朝日	毎日	読売	計
分類の 一致	30	2	0	0	32
(記事)	(1191)	(70)	(0)	(0)	(1261)
[写真]	[738.8]	[39]	[0]	[0]	[777.8]
分類の 不一致	1	1	3	6	11
(記事)	(97)	(50)	(159.6)	(664.4)	(971)
[写真]	[13.5]	[50.4]	[103.6]	[206.6]	[374.1]
対応記事 なし	1	0	0	0	1
(記事)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
[写真]	[4]	[0]	[0]	[0]	[4]
写真なし	0	0	0	0	0
(記事)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
[写真]	[0]	[0]	[0]	[0]	[0]
計	32 (1288) [2044.3]	3 (120) [89.4]	3 (159.6) [103.6]	6 (664.4) [206.6]	44 (2232) [1155.9]

める「義援金寄託」の写真はいうまでもなく人物は特定される。（「義援金」関連記事も同様。）特定化された人物に「顔見知り」が登場する可能性があり、このことがよりいっそう「重油流出事故」に向けての関心と行動への刺激となることが考えられる。

対応する記事に関しても、「北國」は九割強の枚数で写真の内容に対応していることからも特定化による関心の促進をみることができる。

3. 「事故」の象徴化——小松市長辞職問題——

学校設備工事の不正入札事件で一八日に小松市助役が逮捕された。この件に対して一九日の記者会見で市長が「汚職の原因は」小松の風土」と発言し物議を醸した。同日、市議会が重油漂着（一八日）が予想された緊急時」の一日から三日間市長が不在であったことを問題視し、辞職問題に発展することになった。一月二〇日、不在場所と期間に虚偽があることが判明し、二四日に陳謝したが議会が納得せず、二八日に市長自らが三月での辞職を発表した。

この事件を「北國」では、二一日の社説と記事で「非常時の不在」と初めて位置付け、虚偽が明らかになった後の二五日の社説と記事でようやく「ウソ」「うそ答弁」と虚偽を問題化しているが、相変わらず「重油流出事故」を「非常時」と称している。また、二四日の朝刊では、小松市議二六人全員から「平日、非常時の不在問題」に関連する「意見を聞いた」結果を掲載している。ここにおいて、質問内容には、虚偽発言に対する見解を聞くものではなく、「平日、非常時の不在」と「小松の風土発言」および「今後の進退」について市議に問うているだけである。これらから、「重油流出事故」は「小松市のみならず石川県全体にとっても」非常時」であり、その時の不在は郷土を愚弄する発言とともに「首長としてのあるまじき態度」であるとしていることがわかる。

この「非常時」の内実は何かを「北國」は、「地鳴り」という投書欄の投書に語らせている。小松市長問題に関する

投書は二四日から三〇日まで九通あり、「非常時(事態)」という表現は三通あった。「忙しく」、「住民総出」で「三人の犠牲者を出した」「収拾のつかない」事態と「非常時」を規定している。二九日に「非常時」は初めて登場することから考えると、「北國」の記事に影響され、「重油流出事故」の象徴化には成功したが、その実態は象徴なるがゆえに曖昧模糊としたものであったといえよう。

IV 結論と課題

出来事をマス・メディアが報道するとき一定の儀礼的な手続きがみられる。その手続きによって出来事はさまざまな意味付けをされる場合もあるが、特定の意味付けに象徴化されることもある。こうしたメディアの「儀礼化」と「象徴化」の働きを、政治と儀礼の研究とマス・メディアにおける現実構成論をもとに位置付け、具体的事例として九七年一月の日本海重油流出事故に関する新聞報道を再構成した。「災害」が「事故」に変容する過程を追い、象徴化の波及が他の出来事に及ぶことが推測された。また、地方紙報道と中央紙報道との差異を記事と写真との比較によって検討した。その結果、地方紙―中央紙で、具体性―抽象性、現実性―理念性という属性が、記事・写真ともに見いだすことができた。

課題としては、いくつかの点をあげることができる。結論として見いだされたことがあくまで仮説であり、「点」と「点」を結ぶ「線」をより確かなものにしていくひつようがある。たとえば、新聞の論説および読者の意見(投書)と写真・記事との関係の考察や、記事見出しの表現・レトリック、写真の画像としての機能をふまえた分析などが考えられる。また、単発的な災害報道だけでなく比較研究をすることによって、報道の儀礼化、出来事の象徴化ともに一般化が可能になるであろう。送り手との相互作用によるメディアの「上演」という意味においては、メディア・イベントの研究とも関連させた事例・実証研究を行なうことによって、構成された現実がよりはっきりと(メディアの

みならず受け手も「参加」した「現実」として、明らかにすると考えられる。

註

- (1) 関係の中に権力作用を介した支配―被支配関係を目的として指向するものをここでは広く「政治」とみなす。
- (2) 茨木（一九九八b）参照。
- (3) 「受け手」への意識調査と合わせてイメージの違いを比べることができる。
- (4) カーツァーは聖俗の区別なく「ritual」という語を用いている。日本語訳では「儀式」の語に統一されている。
- (5) カーツァーのシンボル概念は「概念の伝達手段として役立つ一切の事物、行為、事件、質もしくは関係」と定義されている。カーツァー（一九八九）：i頁参照。
- (6) コーエン（A. Cohen）の定義（「目的ある社会活動の通常の流れとは別に設定された時間と空間の中で定義される限界づきの一連の行為」）をここではカーツァーは用いている。
- (7) 現実の再構成との関わりや、「笑い」による価値の逆転や現実の対象化とも関連するとみられる。
- (8) 議題設定機能研究で展開された諸知見とも符合する。
- (9) 反乱の正当性を喚起し、民衆の支持を得る場合もあろう。
- (10) 国際的なスポーツイベントの開始前に行なわれる「国旗」の掲揚や「国家」の演奏は、この意味で、単なるパフォーマンスの域にとどまらない働きをもつと考えられる。
- (11) 「北國」は、石川県内の月刊販売部数五九万部のうち、四〇万部（朝夕刊合わせて）を占める（日本ABC協会刊「発行社レポート 新聞 市郡別」一九九七年四月による）新聞である。
- (12) それゆえ、記事、写真の面積が実紙の半分になっていることに注意されたい。
- (13) 新聞記事について、（横の長さ／cm）×（コラムの桁）で表される。
- (14) 坂本（一九八八）の「天皇巡幸の関係構図」、および渡辺（一九九七）の「災害事故についての社会的反応パターン」をそれぞれ参考にして、災害との距離・直接接触の程度に応じて分類枠を設定した。

参考・引用文献

- Adoni, H., & Mane, S. (1984). 'Media and the social construction of reality: Toward an integration of theory and research.' *Communication Research* 11, 323-340.
- Bennett, W., Lance. (1980). 'Myth, ritual and political control.' *Journal of Communication* 30, 166-79.
- Edelman, J., Murray, (1964). *The Symbolic Uses of Politics*. Urbana: University of Illinois Press.
- , (1971). *Politics as Symbolic Action*. New York: Academic Press.
- , (1977). *Political Language*. New York: Academic Press.
- 茨木正治 (一九九五) 「政治・メディア・政治漫画(1)」(『北陸法学』第三巻 第二号)
- (一九九六) 「政治・メディア・政治漫画(2)」(『北陸法学』第四巻 第三号)
- (一九九七a) 「政治・メディア・政治漫画(3)」(『北陸法学』第四巻 第四号)
- (一九九七b) 「政治・メディア・政治漫画(4)」(『北陸法学』第五巻 第一号)
- (一九九八a) 「政治・メディア・政治漫画(5)」(『北陸法学』第五巻 第四号)
- (一九九八b) 「政治・メディア・政治漫画(6)」(『北陸法学』第六巻 第三号)
- カーツァー, D. I. (一九八九) 『儀式・政治・権力』(勁草書房)
- 坂本孝治郎 (一九八八) 『象徴天皇がやって来る』(平凡社)
- (一九八九) 『象徴天皇制へのパフォーマンズ』(山川出版社)
- 渡辺武達 (一九九七) 『メディア・リテラシー』(ダイヤモンド社)